

ななこちゃんとイダテンくん

昨日、ななこちゃんはお引越しをしました。入院しているお母さんが元気になっただら、空気のきれいなところに住んだ方がいいですよと、お医者さまにすすめられたからです。

新しい町には、田んぼや畑がたくさんあって、ななこちゃんを乗せたトラックは畑の中の細い道をゆっくりと進んで行きました。途中でトラックを止めて、お父さんは知らないおじさんに道をたずねました。おじさんはななこちゃんの方を見て、『こんにちは』とあいさつをしてくれましたが、ななこちゃんはあわてて首をすくめてしまつて、何も返事ができませんでした。

ななこちゃんの新しいおうちには、町はずれの大きな森のそばにありました。屋根は青色で、玄関は黒々とした古い大きな森のそばにありました。家の前には赤いレンガでかこつた小さな花だんがあつて、お花が大好きなななこちゃんにはうれしくなりました。

ダンスや冷蔵庫みたいな大きな荷物を運ぶお手伝いはできないので、ななこちゃんはそのことがなくて家のまわりを探検しました。でも、すぐにあきてしまつて、家の外を見てみたいと考えました。

「遠くに行っちゃダメだよ」

後ろでお父さんの声がしました。ちよつとだけだもん——と、ななこちゃん
んは自分に言い聞かせました。もうすぐ一年生になるんだもん。ちよつとだけ
なら大丈夫^{だいじょうぶ}。心の中でじゅもんのようになえながら、ななこちゃんはレンガ
色の門を押^おして外に出ました。

家を出ると右手に大きな森が見えました。家の前の小さな道はくねくねと曲
がりながら森の奥^{おく}へと続いていくようです。

『森の中には何があるのかなあ？』

そう考えると、知りたがり屋さんのななこちゃんは、じつとしていられませ
んでした。森の入り口は大きなライオンが口を開けているようで、ななこちゃ
んは少しだけこわくなりました。けれども、勇気を出してななこちゃんは森の
中に入^いって行きました。森の奥^{おく}に何があるのか知りたくてたまらなかつたので
す。

森の中は思ったほど暗くはありませんでした。木もれ陽が地面まで届^{とど}いてス
ポットライトのようにあちこちに光の輪を作っていたからです。光の輪に手を
かざしてみると、お母さんに手をつないでもらったみたいに温かくて、ななこ
ちゃんはいれしくなりました。

あの杉^{すぎ}の木の根^ね方^{かた}まで。次はあのブナの木の下まで。ななこちゃんは光の輪
をたどって、少しずつ、少しずつ、森の奥^{おく}へと進んでいきました。やがて、森

の中の小道は上り坂になって、坂を登りきったところで行き止まりになっていました。目の前にはななこちゃんの背の倍以上もあるような大きな石垣がたっていて道はそこでおしまいになっていたので。

『つまんないの』

ななこちゃんは心の中でつぶやいて、小石を一つけとばしました。小石は道のわきに立っているモチの木の根に当たって、こつんと音をたてました。見上げるとモチの木はとても大きな木で、ななこちゃんの頭の上に手を差しのべるように枝を伸ばしていました。よく見ると道の反対側の木もモチの木で、向い側のモチの木と手をつなごうとするかのように道の上まで枝を伸ばしています。『あれあれ、これって何かに似てる。なんだっけ？』ななこちゃんは首がいたくなるのをがまんしながら、いっしょけんめいに考えました。けれども『何か』を思い出すことができません。ふと、思いついて、今来た道を少しもどつて離れて見ることにしました。ブナの木の下までもどつて、ふり返って見ると……、

「あつ」

ななこちゃんは小さなさけび声をあげました。モチの木の枝はみごとなカーブを描いて丸いアーチの形をしていたのです。『おうちの門とおんなじだ』、ななこちゃんはそう思いました。あのレンガ色の門のように、モチの木のアーチ

は扉を開いた大きな門みたいに見えました。ななこちゃんはもう一度、石垣いしがきに近よって行きました。でもやっぱり道は行き止まり。石垣いしがきには、よじ登れそうな手がかりさえありません。

『なあんだ、つまらないの』

それでもあきらめ切れずに、ちよつと口をとがらかせながら、ななこちゃん
は木のアーチをくぐりました。

まるでそれを待っていたかのように、ゴゴゴと大きな音がして石垣いしがきが動き
出しました。ななこちゃんの目の前の石が、たて一列いちれつに奥に引っ込んだかと思
うと、小さな石の階段かいでんができたのです。

『どうぞ、おはいりなさい』

石の階段かいでんは、そう言つてななこちゃんをさそっているように見えました。そ
うつとあたりを見回しましたがやっぱりだれもいません。ななこちゃんは、お
そるおそる石の階段かいでんに足をかけました。『急にまた階段かいでんが石垣いしがきに戻つてしまつ
たらどうしよう』ちよつとびくびくしながら、ななこちゃんは用心しいしい
階段かいでんを上がつて行きました。

「わあ」

階段かいでんのてっぺんまで上がったななこちゃんは、思わず大きな声をあげました。
石垣いしがきの上には大きな大きな野原が広がっていたのです。お日さまの光を照り返

して、野原はきらきらと輝かがやいていました。ななこちゃんはそれがまぶしくて、何度もまばたきをしました。

野原には一面に黄色い菜なの花がさいいて、それが一枚いちまいのきぬの布地ぬのぢのように風にうねりながら光っているのです。

ななこちゃんの名前は漢字で『菜な々な子こ』と書きます。『一面に菜なの花がさいている春の野原みたいに、あったかい女の子になりますように』とつけたのよ、『いつかお母さんが話してくれました。ななこちゃんは自分の名前とそっくりなこの野原が、いっぺんで好きになりました。』

だれもない静かな野原はどこまでも続いているように見えました。ななこちゃんはうれしくなって菜なの花のじゅうたんの中に飛びこむと思いきりかけ出しました。かけて、かけて、息いきを切らせて立ち止まって、ふり返るとモチの木きの頭かぶがずいぶん小さく見えました。それでも野原のはては見えなくて、どこまでも菜なの花が続いているのです。

ななこちゃんは、おふとんに倒たおれこむように黄色いじゅうたんにねころびました。ぷんと、花の強いにおいがななこちゃんの鼻はなをくすぐりました。ずっと高い空の上でひばりが鳴く声が聞こえます。お日さまの光は温かくて、長いことトラックにゆられていた疲れつかが出てきたのか、ななこちゃんはどうとうとしてしまいました。

ピーツ。ひばりの高い鳴き声がねむりかけたななちゃんをゆり起こすように響きました。あわてて、ななちゃんは飛び起きます。『かえらなくちゃ』、ななちゃんはモチの木めざしてかけて行きました。

ななこちゃんが家にもどると大きな荷物は全部運びこまれた後でしたので、小さな荷物の片づけをお手伝いしました。ダンボール箱から洋服や下着、食器や台所道具、絵本やおもちやをどんどん出してゆかに広げていきます。それをお父さんといっしょに、ダンスや引き出しにせっせとしまっていました。

日が暮れるころにはダンボール箱は全部ペタンこにたたまれて物置にしまわれ、ゆかの上に広げられた荷物もすつきりとなくなりました。

「今日ね、すつごくふしぎな野原を見つけたんだよ」

ななこちゃんは夕ごはんを食べながら、ふしぎな石垣の階段と大きな菜の花の野原の話をお父さんにしました。お父さんはななこちゃんが一人で森に行つたことを聞いて、少し心配そうな顔をしましたが、それでもななこちゃんの小さな冒険を楽しそうに聞いていました。

「そんなきれいな野原なら、お父さんも見てみたいなあ」

「じゃあ、あしたいっしょに行こうよ」

「あしたはお店の準備をしなくちゃ。でも、菜の花がさいているうちには行っ

てみたいね」

お父さんとななこちゃんはテーブルをはさんで指切りげんまんをしました。

ななこちゃんのお父さんはくつ屋さんです。お客さんの足の型を取って、一足、一足、手作りで、お客さんにぴったり合う世界に一つしかないくつを作るのが仕事です。次の日は朝から、お父さんはお店を始めるしたくにかかっています。

「お散歩に行くね」

道具やくつの材料をならべているお父さんの背中に声をかけて、ななこちゃんはお出かけしました。

森の中を昨日と同じ道をぬけて、モチの木のアーチをくぐると、また石垣の階段があらわれました。ななこちゃんは今日は一息に石の階段をかけ上がりました。石垣の上には昨日と同じように菜の花のじゅうたんが風にうねりながら、きらきらと光っていました。そのじゅうたんめがけて、ななこちゃんがかげだそうとした、その時です。

「うーん。うーん」

すぐ近くで変なうなり声が聞こえてきました。おどろいてななこちゃんはある見まわしましたが、菜の花が風にゆれているばかりで何も見えません。

「うーん。うーん」

それでも、変なうなり声はたしかにすぐそばから聞こえてきます。ななこちやんは耳をすませて、声のする方へそろそろと近よって行きました。菜の花をかき分けながら進んでいくと、声はだんだん大きくはつきりと聞こえてきます。とりわけ、背の高い菜の花のひとむれをかき分けると、その向こうに男の子が苦しそうに体を丸めてたおれていました。

男の子は、ななこちやんと同じくらいの年に見えました。白いふしぎな着物を着ています。白いゆったりとしたズボンをはいていて、上着は一枚の白い布でできているのです。その布のまん中にあなを開けて首を出してすっぽりとかぶっていました。腰のところで細いひもをギュツと巻いてその布をしばっていきます。まるで腰のくびれた、てるてるぼうずみたいです。足は裸足で右の足から血が流れていました。男の子は痛そうに顔をしかめながら、その足をおさええています。

「大丈夫？」

ななこちやんは、おそるおそる男の子に近よると血の出ている足にさわろうとしました。

「さわるな」

男の子はいつそう顔をしかめて、ななこちやんの手をふりはらいました。そ

のひょうしに足に痛みが走ったようで、ぎゅつと目をつぶって苦しそうにまたうめきました。

「でも、ひどいけがだよ。手当てをした方がいいよ」

ななちゃんが手をのばそうとすると、男の子はものすごい目をして、ななちゃんをにらみました。

「ほつといてくれ」

自分では動けないくらいのがをしているのに、ずい分いばりんぼうです。ななちゃんは男の子のけんまくにびっくりして手を引っこめました。でもやっぱり、ほつとけないと思いました。

「うちにおいでよ。手当てしてあげるから。そのままだといつまでたっても歩けないよ」

男の子はまた何か言いかえそうとしましたが、よほど足が痛むと見えて、ぎゅつと目をつぶって足をおさえたまま、だまりこみました。

「おぶさりなよ。歩けないんでしょ」

ななちゃんが、かがんで背中せなかを向けても男の子はぷいっと横を向いて起き上ろうとはしません。

「もう。いじはらないでよ」

ななちゃんも、じれてしまって、いつそ本当にこのままほうって行ってし

まおうとかと思いました。でも、よく見ると男の子の顔はじゆくし過ぎた柿かきの実みたいに真っ赤になっていて、びっしりとあせがふき出ています。そおっと、ひたいに手を伸ばしてさわってみると、日なたで焼けた石みたいに熱あつくなっていて、ななこちゃんはあわてて手を引っこめました。『やつぱり、ほっとけないや』、ななこちゃんはためいきをつきました。

よいしょっと男の子の体を背中せなかから起こしてあげると、両うでを持ち上げてななこちゃんの肩かたにつかまらせてあげました。

「しっかりとつかまってるんだよ」

声をかけると、男のおしりを両手でだきかかえるようにして立ち上がりました。男の子の体は羽はねみたいに軽かるくて、らくらくとおんぶできてしまったので、ななこちゃん**はびっくり**しました。これなら家うちまで休まずに帰れそうです。

菜の花をかき分けながら、ななこちゃんは石垣いしがきの階段かいでんに向かいました。『あんな小さな階段かいでんをこの子をおんぶして下りられるかなあ』ななこちゃんは、ちよつと心配しんぱいになってきました。

ところが石垣いしがきのてっぺんまで来ると、階段かいでんはまるでななこちゃんの心配しんぱいがわかっていたかのよう**に**、ゴゴゴゴと音を立てて大きく広がったのです。ななこちゃんは**楽しく**森の地面まで下りることができました。

「わたし、ななこ。あんたの名前は」

ななこちゃんは森の中の道を歩きながらたずねました。男の子は答えるのがいやそうに、ちよつと顔をしかめながら、

「イダテン」

ぼそりとつぶやくように言いました。

「ふうん。変わった名前だね」ななこちゃんがそう言うと、イダテンくんは怒ったように言いかえしました。

「ななこの方がよっぽど変な名前じゃないか。一個しかないのに、七個だってさ」

「人間は一個、二個って数えないよ。ひとり、ふたり、って言うの」

ななこちゃんは笑ってしまいました。自分の名前をそんなふうに言われたのは初めてだったのです。

「オレの父さんはイダテン様って言うえらい神様なんだ。その名前をオレはもらったんだ。変な名前なんかじゃないやい」

イダテンくんは変な名前と言われたことが、よっぽど気にさわったようでした。

「ごめん」

ななこちゃんはすなおにあやまりました。イダテンくんはななこちゃんの背中の上でお父さんの話をしてくれました。イダテン様はこの世で一番足の速

い神様なのだそうです。むかし悪い魔王が亡くなったおしやか様の骨をぬすんで逃げた時、その魔王を追いかけて骨を取りかえたのもイダテンくんのお父さんなのだそうです。

「だからオレもとびつきり足が速いんだ」

「ふうん。だったら早く治さないといけないね。走れなくなったらたいへんだ」
森を出て、ななこちゃんは家にもどってきました。

「お父さん。たいへんだよ」

玄関でななこちゃんが大きな声を上げると、お父さんはあわててお店から出てきました。見るとななこちゃんがしらない男の子をおんぶしていて、男の子の足からは赤い血がぼたぼたと落ちています。男の子の顔が真っ赤になっていて、あせをびっしりかいているのを見て、お父さんは男の子のけがががずい分ひどいようだと考えました。

すぐに電話でお医者さまをよんでから、お父さんは男の子をふとんに寝かせました。ななこちゃんも、ほうたいとばんそうこうを持ってきて、お父さんに傷口をしばってもらいました。

お医者さまはすぐに来てくれて、イダテンくんの傷口をじっくりと調べました。

「何か毒のある草か木をふみぬいたんだね。体の中に毒が回っているようだ」

それからお医者さまは、いやがってあばれるイダテンくんをお父さんと二人がかりでおさえつけて、体の毒を消す注しやをしました。ななこちゃんは痛そうな注しやを見ているのがいやだったので、その間に台所に行って氷まくらを作りました。お母さんが時々熱を出してしまうことがあるので、お父さんの手伝いをしていて、氷まくらを作るのには慣れていのです。

氷まくらと大きなタオルを持って部屋にもどると注しやは終わっていて、お医者さまとお父さんが話をしていました。

「ひと晩ゆつくりと寝かせれば熱も下がるでしょう。けがの方は治るまでに少し時間がかかるかもしれない。ともかく、この子のご両親が心配なさっているでしょう。連絡をとったほうがいいですよ」

お父さんはイダテンくんにおうちの電話番号をたずねました。けれどイダテンくんは首を横にふって、そんなものはありませんと言いました。

「お父さん、イダテンくんのお父さんは、いだてんさまって言うえらい神様なんだって。神様だから電話を持ってないんだよ」

お父さんもお医者さまもびつくりしました。韋駄天さまという足の速い神様のことは聞いたことがあります。男の子が来ている風変りな着物や、はだしの足を見ているとふしぎにこの男の子が神様の子供だということも納得できる気がしました。

イダテンくんは、うつすらと目を開いて言いました。

「父さんは神様だから、ぼくがけがをしたことも、ななこさんの家にお世話になっ
ていることもとつくに知っています。ごめいわくだろうけど、今晚ひと晩
は泊めていただきなさいと申しています」

まるでおとなのようなしやべり方をして、『どうぞよろしくおねがいます』
と言うと横になったままぺこりとおじぎをしました。

ななこちゃんには、『オレ』とえらそうに言っていたのに、お父さんには『ぼ
く』と言っているイダテンくんがおかしくて、ななこちゃんはお父さんの後ろ
でくすくす笑いました。

お医者さまは熱を下げる薬を置いて帰って行きました。ななこちゃんは氷ま
くらとタオルをお父さんにわたすと台所にもどっておじやを作り始めました。
お母さんに少しずつ教わって、ななこちゃんはお料理だってできるのです。お
母さんに買ってもらった子ども用の包丁で、まずは野菜を小さく切っていきま
す。にんじん、しいたけ、はくさい、ほうれんそう、ねぎ。どれも体に良いも
のばかりです。たつぷりのお湯をわかつて、かつぶしでおだしを取って、なな
こちゃんは野菜をやわらかく煮ました。ゆうべのごはんを入れて、お塩をふつ
て、といた玉子を流しこんだら三人分のおじやのできあがりです。仕上げにな
なこちゃんはおしょうゆをひとたらしと、ごまをひとふり入れました。ごまの

こうばしいにおいがしてきて、ななこちゃんのおなかが、ぐうと鳴りました。おわんに取り分けたおじやをお盆ぼんに乗せてイダテンくんのところにもどると、イダテンくんはあせをふいてもらって、ななこちゃんのパジャマに着がえて横になっていました。それは、ななこちゃんのお気に入りの黄色いパジャマだったので、ちよつといやだなあとななこちゃんは思いました。でも、イダテンくんはほかに着替えを持っていないし、病気だからしかたないかと思いい直すことにしました。

「おじやを作ったけど、食べられる？」

ななこちゃんがたずねると、イダテンくんは、『いらない』とすねたように言いました。けれど、言ったとたんイダテンくんのおなかが、ぐうと鳴ったので、ななこちゃんもお父さんも声を立てて笑わらいました。

お父さんがちやぶ台を運んできて、イダテンくんは『おじやなんて食べたことない』とまだ文句もんくを言いながら、スプーンですくって口に入れましたが、熱あついおじやおどろいて目を白黒させながらむせてしまいました。

「よくふいて、冷ましてから食べるんだよ」

ななこちゃんが教えると、ふた口目からは、ふうふうとスプーンの上で冷ひやましてから口に入れました。それでも、味は気に入ったようで、イダテンくんは

二回もおかわりをしました。お昼ごはんが済むと、お医者さまのくれた薬を飲んで、イダテンくんはあっという間にねむり始めました。

イダテンくんがねむると、お父さんはこっそりイダテンくんの足の型かたを取りました。取った型紙を持ってお店に入って行くと、ほどなく木づちの音が聞こえ始めました。イダテンくんのためにくつを作ってあげるつもりです。

ななこちゃんは台所にもどってお昼ごはんの片づけをすませると、今度はお母さんに教わったばかりのリンゴのパイを作り始めました。明日の朝ごはんに三人で食べようと考えたのです。

バターと粉とお水で生地こをこねて、野球のバットを短くしたようなめん棒ぼうで生地をのぼしていきます。ななこちゃんのはのぼした生地を折り重ねてはまたのぼすことをくり返しました。小さなななこちゃんは、うでだけの力では足りないのでびよんぴよんはねて体重をかけないと生地がうまくのびません。そばで見ていると、まるで体そうかダンスをおどっているみたいで、台所の前を通りかかったお父さんは笑わらってしまいました。うすくのぼした生地を半分はんぶんに切つてパイざらにしくと冷蔵庫にしまえます。それからななこちゃんななこちゃんは、引越ひっこしのおばあちゃんおばあちゃんがくれた、とっておきのリンゴを小さく切つておなべに入れると、砂糖とうとうとバターとレモン汁じゅうといっしょにやわらかく煮にました。

最後に、パイざらにリンゴをならべて、残りの生地を細いひものようにのぼ

すと、りんごの上に格子こうしもようにかかけました。仕上げに卵をといて生地こにぬると、ななこちゃんはパイを冷蔵庫れいぞうこにしまいました。オーブンはななこちゃんには使えないので、明日の朝にお父さんに焼やいてもらうのです。

夜になっても、イダテンくんはぐっすりとねむっておりましたので、そのまま寝かせておいて、お父さんとななこちゃんの二人だけで夕ごはんを食べました。それから、ななこちゃんがふとんに入ってねむった後あとも、お店からはお父さんが木づちを打つ音が夜おそくまで響ひびいておりました。

次の朝、ななこちゃんはリンゴのパイが焼ける良いにおいで目をさましました。お父さんが早起きをしてパイを焼やいてくれているのです。ななこちゃんはイダテンくんのねむっている部屋への様子ようすを見に行きました。『まだ寝てるかもしれない』、そう思ってななこちゃんはそうっと部屋への戸を開けました。けれど、イダテンくんはもう起きていて、体ていそのようにふとんの上で足ぶみをしていました。

「けがは？起きて大丈夫だいじょうぶなの？」

「オレは神様の子だ。けがなんか、一晩寝れば治るさ」

そういってイダテンくんは足のほうたいをくるくるとほどきました。見ると、昨日きのう血ちが出ていた傷口きずぐちはきれいになくなっていて、まるではじめからけがなんかしていなかったみたいです。

「すごいんだねえ」

ななこちゃんが感心すると、

「へへん」

と、イダテンくんはとくいそうに鼻の下を指でこすりました。熱もすっかり冷めたようです。

「朝ごはん、いつしよに食べよう。夕ごはん食べてないからおなかかすいていでしょ」

台所のテーブルにはきつね色に焼けたリンゴのパイが大きなお皿にもりつけられていて、焼けたリンゴの良いにおいが部屋いっぱいに広がっていました。ななこちゃんがパジャマを着がえて入って行くとイダテンくんはもう白いふしぎな着物に着がえてイスにすわっていました。

「おはよう」

お父さんがななこちゃんに声をかけながら三人分の紅茶をいれてくれました。

さつそく、焼きたてのパイを切り分けて朝ごはんを食べながら、お父さんはイダテンくんのけがの具合をたずねました。イダテンくんの傷がなくなっているのを見て、お父さんは目を丸くしましたが、ほっとした様子でした。イダテンくんはよほどおなかかすいていたのでしよう。パイをふた切れもおかわりし

ました。

「本当にお世話になりました」

パイを食べ終えるとイダテンくんは、ぴよこんと立ち上がって、きちんとおじぎをしました。

「ほんらいなら、父がうかがってお礼を申し上げるのがすじですが、ゆえあって父は神の世界をはなれることができません。ぼく――、いえ、わたくしがけんぞくのそうだいとして、ななこさんとお父さまのご親切にお礼を申し上げるごぶれいをおゆるし下さい」

とつぜん、じゅもんのような言葉をとなえるイダテンくんが、ななこちゃんには知らないおとなの人のように見えました。お父さんはっこり笑って立ち上がると、

「これはごていねいなごあいさつ、いたみります」

と、おとなの人にするようにていねいにおじぎをしました。それから、イダテンくんの手を引いてお店の方に連れて行きました。ななこちゃんがあとからついて行くと、作業台の上に真っ白な新しいくつが乗っていて、お父さんはそれを木の型からははずすと、イダテンくんに渡しました。

「はいてごらん。君の足に合わせて作ったんだ」

イダテンくんは困ったような顔になって、その白いくつを見ていました。

「ぼくたち神は、はだしで走るものです。せつかくですけど、くつは重たいだけじゃまになりますから、はきません」

「まあ、そう言わずに」

お父さんは笑いながらイダテンくんの足もとにかがむと、片足ずつ持ち上げてくつをはかせてあげました。イダテンくんは、しかたなさそうにくつをはいたまま店の中を歩き回りました。最初は生まれたての子馬のようにぎこちなく、それから少しずつスピードをつけてはね回りながら。やがてダンスをおどるよりに軽やかに。イダテンくんがスピードをつけてくるくる回ると、足もとに小さなつむじ風が、ごうつと音を立てて舞い上がりました。

「すごい。このくつすごいです。まるでぼくの足そのものみたいだ。くつって、こんなにすごいものだったんですか？」

「お父さんのくつはとくべつなんだよ」

今度は、ななこちゃんがイダテンくんのまねをして、得意そうに指で鼻の下をこすりました。

「でも、ぼくお金を持っていない。だからこのくつを買えません」

イダテンくんはダンスをやめて立ち止まると、しよんぼりとした声で言いました。

「まさか、神様からお金をいただくわけにはいかないよ。そのくつはこのお店

から神様へのプレゼントだ。特にじょうぶなかわで作ってあるから、もう、けがをすることもないだろう。そのくつで世界を思い切りかけなさい」

笑いながらお父さんはイダテンくんの肩を叩きました。それを聞いたイダテンくんの顔は、山のはしから顔を出した夜明けのお日さまのようにかがやきました。

「ひとつだけ、ぼくにできるお礼をさせて下さい」

ふと思いついたようにイダテンくんは店のまどべに行くときまどにかかったかん板を取りました。

『くつのおみせ

あなたにぴったりのかつを作ります』

と書かれています。イダテンくんはその文字の下に指を当てると、そつと目を閉じました。それから低い声で何かじゅ文をとなえると、一息に指をすべらせました。すると、かん板にきれいな朱色の文字が浮かび上がったのです。

『くつのおみせ

あなたにぴったりのかつを作ります

イダテン様ごようたつ』

「これは正式な父さんのサインです。お客さまがたくさん来ますようにって」「やあ、世界一足の速い神様にみとめてもらえたなんてすごいな。くつ屋にと

って一番のめいよだよ」
うれしそうにお父さんは朱色の文字を指でなぞると、かん板を大事そうにまどにもどしました。

あの菜の花の原っぱから神様の国に帰るとイダテンくんが言いましたので、
ななこちゃんは原っぱまで見送りに行くことにしました。

「本当にお世話になりました」

レンガ色の門のところでもう一度おじぎをして、イダテンくんはお父さんにお別れを言いました。

森の中の道を通りながら、ななこちゃんとイダテンくんはたくさんお話をしました。

ななこちゃんは、お母さんのこと、前に住んでいた町のこと、四月から行く小学校のことなどを話しました。イダテンくんは、今までに行った世界のさまざまな国やけしきの話をしてくれました。

まるで千の夕立ちを集めたような滝に大きなじが、いつもかかっていること。何万羽もの鳥がいつせいに飛び立って昼間の空が暗くなる話。地の果てまで続いている長い長いお城のかべ。大きながけから見下ろした、くじらの泳いでいる海のこと。

どれも、ななこちゃんには想像もつかない光景ばかりで本当にそんな場所があるなら行ってみたいなあと思いました。特に、ななこちゃんは海をみたことがないので、くじらが泳いでいる海の話に夢中になりました。

菜の花の原っぱまでの道はあまりにも短くて、イダテンくんの話が少ししか聞けなかったことが、ななこちゃんには残念でたまりませんでした。

「ねえ、ちよつとあそんで行こうよ」

ななこちゃんはたまらず、イダテンくんの服のすそを引っぱりながら言いました。

「ふん、オレはいそがしいんだ。ななこことあそんでるひまなんかないやい」

イダテンくんは急にいぼりんぼうにもどって、ななこちゃんの手をふりはりました。その言い方があんまりじゃけんだったので、ななこちゃんはふりはらわれた手を広げて、その手をじっと見入るようにうなだれてしまいました。イダテンくんはだまりこんでしまったななこちゃんを見て、困ったような顔になってほほをかきました。

「いやさ、オレきのう、父さんの用事の中だったんだ。それが、へまやっちゃってけがしたから、その用事がすっかり遅れてるんだ。だから、悪いけどすぐにも行かなきゃ」

そういうことならしかたありません。ななこちゃんも顔を上げて、こくと

一つうなずきました。

「わかった。じゃあ、またいつか遊ぼうよ」

本当はせつかくこの町に来て、さいしよの友だちができかけていたのに、すぐにお別れしないといけないことが残念でたまりませんでした。ぐつとがまんしました。

「ああ、またいつかな」

イダテンくんはそう言って、かけ出そうとしましたが、ふと思いついたようにななこちゃんをふり返って、右手のこぶしをつき出しました。

「もうちよつとで忘れるとこだった。これをやるよ」

イダテンくんが手を広げると草でできたふえが手の中になりました。銀色の糸が輪になってついています。イダテンくんはその輪をななこちゃんの首からかけてあげました。

「これなあに？」

首から下がったふえを指でつまんで、めずらしそうにながめながらななこちゃんはずねました。

「アシぶえさ。その筒の口から息を吹くと高い音が出る」

ためしにななこちゃんが吹いてみると、ピーツとひばりが鳴くようなきれいな音が出ました。

「昨日、ななこはオレを助けてくれた。だから、いつかななこに困ったことが起きたらオレが助けてやる。困ったときはそのふえを吹け。世界のはてからだっけ」

「ななこちゃん、指でふえをくるくるまわしながら、ちよつと考えて言いました。」

「じゃあ、どうしてもイダテンくんと遊びたくなったら吹いていい？」
イダテンくんは、きよとんとした顔をしましたが、すぐに顔を真っ赤にする

と、
「ふざけるな」

と、すごいけんまくで怒りました。

「そんなことでふえを吹いたらぶつとぼすぞ。それで、二度とななこのところには行かないからな。いいか？本当にどうしようもなく困ったときにだけそのふえを吹け。遊び半分で吹いちゃだめだ」

「ななこちゃん、イダテンくんの怒った顔にすくんでしまっ、小さくうなずきました。」

「わかった」

「それを見て安心したようにイダテンくんはちよつと笑いました。
「じゃあ、元気だな」

言ったかと思うとイダテンくんは地面をけりました。ごうつと音を立ててつむじ風がまい、あたり一面の菜の花が大きく波打ちました。きらきら光る黄色い波がまぶしくてななこちゃんは思わず目をつぶりました。ななこちゃんが次に目を開いたときには、イダテンくんはもうどこにもいませんでした。

次の日から、ななこちゃんのお父さんはくつ屋さんを始めました。『イダテン様ごようたつ』のかん板がきいたのか、最初の日から何人ものお客さまが来ました。お父さんはせつせとお客さまの足の型を取って、くつを作りました。何日かたつと、ななこちゃんちのくつは、じょうぶで、軽くて、はきごちが良いとひょうばんになって、ますますお客さまはふえました。お店はたいそうはんじょうしましたがお父さんは大いそがしで、ななこちゃんと遊ぶひまもありません。おまけに、何日も雨がっついて、外に出かけられなかったので、ななこちゃんは一人で家の中で遊ぶしかありませんでした。何度か、あのアシぶえを出して、吹いてみようかなとななこちゃんは思ったのですが、イダテンくんの怒った顔を思い出すとやっぱり吹けませんでした。

やがて、もうすぐななこちゃんが小学校に入学する日が近づきました。明日はお母さんも退院して、入学式には学校に来てくれます。ななこちゃんはひさ

しぶりにうきうきした気分で、お昼ごはんのしたくをしていました。スパゲティをゆでて、レトルトのトマトソースをかけるだけのお料理ですが、トマトのいいにおいがすると、ななこちゃんのおなかはぐうと鳴ってしまいました。ふと耳をすませると、お店の方から聞こえていた木づちの音は止んでしまった。ひと休みしているのかな？、ななこちゃんはお父さんをよびにお店のドアを開けました。でも、中をのぞいたとたん、入口のところでは動けなくなっていました。

お父さんは作業台の横に、いすから転がり落ちるようにならしてたおれでいました。お父さんの体のわきには木づちが投げ出されるように落ちていて、作業台の上には作りかけの黒いかわぐつがぼつんと乗っていました。

『お父さんを助けなきゃ』

じつと動かないお父さんを見て、気持はあせるばかりなのに、お店の道具の一部になつたみたいにな、体はくつを乗せている金とこよりもかたくなって、動かすことができません。

と、お父さんの指がぴくりと動きました。まるでピアノをひくみたい指が順番に動く手ひらにぐつと力が入って、お父さんは起き上がろうとしたようです。けれどすぐに手はのび切ってしまった。また動かなくなりました。ななこちゃんは、ぽんと背中を押されたように、お店の中に飛び込みました。

お父さんのそばにかがみこんで顔をのぞいてみると、おとうふより白い顔を
して、そのくせくちびるだけは変にむらさき色です。おでこにびっしりと
汗をかいて、さわってみると、こわいくらいに熱くなっていました。

ななちゃんはお父さんを部屋までつれて行ってねかせなきやと考えまし
た。でも、お父さんの体は重たくて、いくら引いても押しても動かすことがで
きません。しかたがないので部屋からおふとんを引っばってきて、お店の中に
しくと、お父さんの体をごろごろ転がしてふとんの上に乗せました。それでも
お父さんはぴくりとも動きませんし、声もたてないので、ななちゃんはます
ますこわくなってきました。

お父さんにふとんをかぶせて、ななちゃんは電話をかけに行きました。電
話台の上のかべには、だじな電話番号が書かれた紙をお父さんがはり付けて
くれています。字はひらがなで書いてくれたので、ななちゃんにも読め
ます。指でなぞって、『すずきせんせい』と書かれた番号を見つけると、なな
ちゃんは電話をかけました。ぴたりと耳につけた受話器からよび出しの音が
聞こえます。けれども、なかなかだれも電話を取ってくれません。

「はい、すずきクリニックです」

ようやく電話がつながり、女の人の声が聞こえました。
「もしもし、森のそばのくつつ屋ですけどお父さんが病気で。すぐ、せんせい

にきてもらえませんか」

電話をかけてきたのが小さな女の子の声だったので女の人はおどろいたようでした。それから困った声になって言いました。

「ごめんなさい。今日は先生は遠くの病院にご用があつて夜まで帰らないのよ。おうちの人はほかにだれもいないの？」

「お父さんとわたしだけです」

電話の向こうがわで女の人は考えこんでいるようでした。『うーん』とため息のような小さな声が聞こえました。

「ともかく、先生に連絡とつて、すぐに知らせてあげるわ。おうちの電話番号を教えてください」

ななこちゃんは電話に、はられた新しい番号を言って電話を切りました。それからまた、電話番号の紙をなぞつて、お母さんが入院している病院に電話をかけました。けれど、お母さんは検査を受けていて夕方まで、もどりませんと言われてしまいました。本当は119に電話をして救急車をよべば良かったのですが、ななこちゃんはすっかりあわててしまつて思いつくことができませんでした。電話台の中の黄色い電話ちようで別のお医者さまを調べようとしたが、ななこちゃんは字が読めないのです、ぶあつい電話ちようのどこにお医者さまの番号がのっているのかさえわかりませんでした。

ななこちゃん電話ちょうでお医者さまをさがすのをあきらめると台所にもどって氷まくらを作りました。ふと、テーブルの上を見るとスパゲティはすっかりのびて、さめてしまっていました。でも、何か食べたい気持にはならなかったので、ほうっておいて急いでお店にもどりました。お父さんはあい変わらず白い顔のままです。頭の下に氷まくらをして、『ふうっ、ふうっ』と、苦しそうに息いきをするばかりで目を開くことはありませんでした。

それから、ななこちゃんは家の外に出て、だれか通りかからないかと、いっしょけんめいにあたりを見回しました。だれか大人おとなの人が通りかかったら助けしてくれるかもしれないと思ったのです。けれど、ななこちゃんの家は町のはずれで、その向こうには森しかありませんでしたので、いつまでたっても誰も通りかかりませんでした。

ななこちゃんは、もうどうしていいのかわからなくなって、今にも泣き出しそうになりました。

ピーッ。

その時、ななこちゃんの頭の上でひばりの鳴き声が響ひびきました。その声は、よく似た音色のふえのことをななこちゃんに思い出させてくれました。今こそ、あのアシぶえを吹く時だとななこちゃんに教えてくれたみたいです。ななこちゃんこは急いで家にもどると、かべにかけておいたふえを外して口にくわえまし

た。

ピーツ。

大きく息を吸うと、ななこちゃんは思い切りふえをふきました。ふえの音はかべに吸い込まれるように消えて、また部屋の中はしんとなりました。ななこちゃんはせわしなく部屋の中を見回しましたがイダテンくんはいません。開いておいたまどから身を乗り出して庭を見回しましたが、やっぱり誰もいません。『せかいのはてからだってかけつける』って言ったじゃない。ななこちゃんは怒ったように、何度も何度もふえを吹きました。

ピーツ。ピーツ。ピーツ。

ごうつと、庭につむじ風がまつて土ぼこりがわき上がりました。土ぼこりの向こうには、あの白い着物を着たイダテンくんが立っていました。

「おそいよ」

ななこちゃんは口をとがらせて言いました。

「ごめん、ごめん。あんまり急いだんで、と中で転んじやった。でも、ふえは一回鳴らせば聞こえてるぜ」

あい変わらず、イダテンくんはいばりんぼうな口ぶりで言いわけをしながら、身軽にまどを乗りこえて部屋の中に入ってきました。ななこちゃんのお父さんが作ってくれた、あの白いくつをはいたままでしたが、今はそれどころじゃな

いと思って、ななこちゃんは気にもしませんでした。

「で、どうしたんだ」

ななこちゃんの半べそ顔を見ながら、イダテンくんはちよつと心配そうにたずねました。

「お父さんが病気になっちゃったの。でも先生は遠くの病院に行つて来てもらえないの」

ななこちゃんは、イダテンくんの手を引きずるようにしてお店に連れて行きました。ふとんの中で白い顔をしてねむっているお父さんを見たたん、イダテンくんは口を一の字にぎゅっと結びました。目のはしをつり上げてお父さんをおこつたような顔で見下ろしているの、横で見ているななこちゃんはちよつとこわくなつてしまいました。

「これは急がなくなっちゃいけないみたいだ。先生つてオレを治してくれた人だよな。今はどこかの病院に行つてるんだよな」

「うん。遠くの病院だつて言つてた」

「よし、すぐ連れてきてやる」

イダテンくんがきつぱりと言ひ切つたので、ななこちゃんはびっくりしてしまいました。

「でも、どこの病院か知らないよ」

「かまうもんか。別に外国に行ってるわけじゃないんだろ。片っぱしから病院をのぞいて回ればすぐに見つけられるさ」

時間がおしいというように、イダテンくんはお店を飛び出して表に出ました。あとからななちゃんも急いでついて行きます。

「すぐにもどるからな」

ふり返って言いながら、イダテンくんの足元にはもうつむじ風がまい始めています。ぽんと軽やかに地面をけたかと思うと、イダテンくんの姿はもうなくなっていて、ななちゃん目の前にもうもうと土ぼこりが立っているばかりでした。

何だかいつつもせつかちだよねえ。ななちゃんは半分あきれて、半分おかしくて、土ぼこりが散って行くのを見ながら少し笑いました。

「でも、だいじよ……」

『うぶかなあ』というななちゃんのひとり言は、と中でしり切れトンボになつてしまいました。またつむじ風が起ったかと思うとイダテンくんが目の前に現れたのです。『忘れもの？』と聞こうとしたななちゃんの言葉はのどに引っかかってしまいました。

イダテンくんの背中には今にも目を回してしまいそうな顔でお医者さまがおぶわれていたのです。

「先生こつちだ」

イダテンくんは、何か言おうとしているお医者さまをおぶったままお店に飛びこみました。

イダテンくんの背中せなかから下ろされたお医者さまはまだ何か言おうとしていました。ふとんの中のお父さんを見たたん顔つきが変わりました。

「こりやいかん」

急いでみやくを取って様子ようすをみると、ななこちゃんに電話を借りてお医者さまは救急車きゅうきゅうしゃを呼びました。救急車きゅうきゅうしゃを待つ間にイダテンくんに急かされながら、ななこちゃんは電気やガスを切つて家の戸じまりをすませました。

救急車きゅうきゅうしゃは大きなサイレンを鳴らしながらやつてくると、ななこちゃんやイダテンくんもいっしょに乗せてすぐに病院に向かいました。救急車きゅうきゅうしゃの中もお医者さまは白い服ふくを着た男の人たちといっしょに機械きかいでお父さんの体を調べたり、注しやを打つたりしてくれました。ななこちゃんは心配そうにお父さんを見ています。しかありませんでしたが、となりであぐらをかいてめずらしそうに救急車きゅうきゅうしゃの中を見回しているイダテンくんを見ると、どうしてだかもう大丈夫だいじょうぶな気がして少し安心しました。

救急車きゅうきゅうしゃが着いたのは、ななこちゃんのお母さんが入院している病院でした。お父さんはタイヤのついたベッドに乗せられて、病室びやうしつに運ばれて行きました。

お医者さまの手当てがきいたのか、病室びやうしつについたときにはお父さんの顔にも赤みもどつていて、息いきもずいぶん楽らくになっているように見えました。

この病院にお母さんが入院していますとななこちゃんが言うとお医者さまはすぐに連絡をとってくれて、検査けんさを終おえたお母さんが病室びやうしつにやってきました。「ほんとうにどうもありがとうございます」

お母さんは、はじめて会ったイダテンくんおとに大人となの人にするみたいないないなおじぎをしてお礼を言いました。

「いえ、この前まへぼくは、ななこさんにもお父さんにもたいへんお世話になりました。ごおん返しをするのは当り前のことですよ」

イダテンくんも、よそいきのような話し方をします。それから、お母さんはお医者さまとお父さんの病氣びやうきのことを話してました。

「働き過ぎでつかれがたまっていたんだと思いますよ。注しやを打っておきましたし、一晩ひとばん眠ねむれば元氣げんきになられるでしょう。しかし、手当てが遅おそければ大変なことになるっていたかもしれませぬ。イダテンくんにはよくお礼を言っただけで下さい」

お医者さまのお話を聞いて、ななこちゃんは背中せなかを冷たい手でなでられたみたいみにぞわぞわとした気分になりました。

もうお日さまも少しづみかけていたので、お母さんが病院にお願いをしてなな

こちやんとイダテンくんは病院に泊めてもらうことになりました。お父さんはまだ眠ったままでしたし、ちやんと元気になったことを見とどけたいと言って、イダテンくんも今日はすぐに帰るとは言いませんでした。

夜、お父さんのベッドのとなりには子供用のベッドをならべてもらって、ななこちやんとイダテンくんは眠りました。眠る前にななこちやんは海の話をおねだりしました。お父さんを起こさないように二人は、ひそひそ、ひそひそ、ないしよ話をするように長いことおしゃべりをしていました。

次の朝、お医者さまが言っていた通りお父さんはすっかり元気になって、退院が決まったお母さんもいっしょに四人で家に帰りました。

とちゆうの八百屋さんでお母さんはどっさりイチゴを買いました。そして家に帰るとさっそく、ななこちやんの大好きなイチゴのタルトを焼いてくれました。お父さんは庭にテーブルを出して、四人はすっかりあたたかくなった春風にふかれながら、焼きたてのタルトを食べました。

「それにしてもよくお医者さまを見つけることができたね」
お父さんは紅茶をイダテンくんに注いであげながら感心したようにたずねました。

「ぼくの目はとくべつなんです。どんなに速く走っていても立ち止まっているみたいになまわりの景色がはっきり見えるんですよ。それにこのくつのおかげで

前よりうんと速く走れるようになりました。このくつはやっぱりすごいです」
イダテンくんはだいいじそうに、白いくつをなでました。

「五十四番目に通りかかった病院のまどから、あの先生の後ろ姿が見えたから、すぐにそのまどから飛びこんで先生を背中に乗せてもどってきたんです」

イダテンくんは『おいしい、おいしい』としきりに言っていて、三切れ目のタルトをほおぼりながら、こともなげにそう言いました。ななこちゃんはまたたき一つもしない間にそんなにたくさんの病院を走り回ったイダテンくんをすごいなあと思いました。それが、それよりも二枚目のタルトもあつという間になくなるんじゃないかと心配になりました。

「本当にお世話になりました。お父さんの韋駄天様にもよろしくお伝え下さい」
お父さんとお母さんは、レンガ色の門のところまでいねいにおじぎをして、イダテンくんにお礼を言いました。

「どういたしましたして、ぼくの方こそおいしいおかしをごちそうさまでした」
イダテンくんもおじぎをして、お父さんとお母さんにお別れを言いました。ななこちゃんはまだ、あの原っぱまでイダテンくんを見送りに行くことにして二人で森に入りました。ひさしぶりに見る森の木々はその色をぐんと濃くして、はじめてななこちゃんがこの森に来た時とは別の森のように見えました。お日

さまのスポットライトは、しげり始めた木の葉にさえぎられて、細くこまかい光の輪をまばらにまきちらしていました。それでも日の当たらない木々のかげさえほんのりと温かいです。

何かおしゃべりしたいんだけど――ななちゃんはそう思いましたが、話し出したとたんにあの原っぱに着いてしまいそうで、二人はだまりこくって森の中を歩いて行きました。

やがて、モチの木のアーチの向こうに石垣が見えてきます。アーチをくぐると、今日も石垣の階段が手をさしのべるように道を開いてくれました。一段、一段、数を数えるように二人は階段を上りました。てっぺんまで上って目の前の原っぱを見たななちゃんは息をのみました。

「とっくにかれちゃったと思ってた」

黄色い菜の花のじゅうたんが、今日も風にうねりながら光っていたのです。

「あれ、知らなかったのか？この野原は本当にある野原じゃないんだ」

「どういふこと」

「ななこのお父さんとお母さんが、菜々子っていう名前をつけた時に、ななこの心の中に生まれた原っぱなんだよ。だからいつだって菜の花がさいている。ななこが自分の名前をわすれでもしないかぎりな。けど、だれかをこの森につれてきてもこの原っぱを見せるのはむりだ。だれも人の心の中を見ることなん

かできないからな」

「ふうん。そうなんだ」

「ななこちゃんはお父さんといっしょにこの菜の花を見る事ができないと知って、ちよつとがっかりしました。」

「ねえ。ちよつと遊んで行こうよ」

「きつとまたことわられるんだろ。うなあと思いつながら、ななこちゃんはイダテンくんの服のすそを引っぱりました。意外なことに、イダテンくんはすぐには返事をせずに考えこむような目になって菜の花の波を見えていました。そして思いつたように『いいよ』とうなずいたのです。」

「わあつ、じゃあかけこしよう。ななこだって速いんだよ」

「はりきっているななこちゃんの顔を気のどくそうに見ながらイダテンくんは言いました。」

「勝てっこないだろ。ありんこと流れ星が競争するようなんだ」

「じゃあ、うでずもう。おうちの手つだいしてるから力持ちだよ」

「イダテンくんの細いうでを見ながらななこちゃんは自信ありげに言いました。ところが、いざためしてみると、てんで歯が立ちません。」

「走るつてのは足だけ強くてもだめなんだ。うでのふりがとびきりじゃないと速くは走れない」

得意とくいそうに言うイダテンくんを見て、ますますななちゃんはくやしくなりました。

かくれんぼをしてもすぐに走り回って見つけられるし、石けりをしたらいダテンくんがけた石は遠くの空へ飛んでいってしまってお話になりません。木登きのぼりをしてもななちゃんが木に足をかける前に、イダテンくんは木のとっぺんから見下ろして笑わらっているのです。そのくせ、息いきを切らせているのはななちゃん一人でイダテンくんはへっちゃらな顔をしているのです。

「それよりさ、どこかななこの行きたいところにつれてってやるよ」

ふうふうと、息いきを切らせてくやしがるななちゃんがかわいそうになったのか、イダテンくんは木のとっぺんから風のように飛び下りてきて言いました。「どこに行ってみたい？」

「海を見たい」

まよわずななちゃんは言いました。

「よし、おぶされ。しっかりつかまってるよ」

ななちゃんがいダテンくんの肩かたをしつかりにぎっておぶさると、イダテンくんは地面をけりました。

ななちゃん耳元で風がうなり声を上げました。菜の花の黄と緑がいく万もの黄金色こがねいろのきぬ糸になって二人をくるむように流れていきます。森の緑。畑

の黒。灰色のビル。あか、あお、き、むらさき、こう水のようにわき起る色
たちがみるみる混ざり合って真っ白な光に変わります。鳥の鳴き声も、街のざ
わめきも、またたくまに消えてななこちゃんの耳にはイダテンくんの足音しか
聞こえなくなりました。真っ白な光の中を時計の秒針が全速力で文字ばんを回
るように、力強く、そのくせリズムカルにあの白いくつが立てる軽やかな足音
だけが響いているのでした。その音を聞いていると、ななこちゃんは自分がい
まどこにいるのか、それどころか動いているのか止まっているのかさえわから
なくなってしまうました。

だしぬけに、白い光がほどけて色たちが息をふきかえました。気がつくとな
なこちゃんは今レンガ色をした土の上に立っていました。でこぼこした赤茶色
の地面がどこまでも続いています。

「あんまり前に入るなよ。落っこちるから」

イダテンくんの声に顔をあげたななこちゃんは目の前のけしきを見て声が出
せなくなりしました。ななこちゃんとイダテンくんは高い高いがけの上に立っ
ていたのです。はるか下の方にお日さまの光をはね返しながら青い水が広がっ
ていて、空のはてまで続いています。

「あれが海だ」

ななこちゃんは、おそろおそろ体をのり出して海をのぞきこみました。青い

水は底^{そこ}がはつきり見えるほどに透明^{とうめい}で、じつと見ていると吸^すいこまれてしまい
そうです。よく見ると海の色はいく万もの色ガラスをまき散^ちらしたように少し
ずつちがっていて、まばたきする度にまた別の色に変わっていくのです。

その大きなモザイクの上を、白い線がいくつもいくつももり上がって遠くか
ら目の下の砂^{すな}浜^{はま}に近づいてきては重なって消えます。

「あれが波^{なみ}？」

「そうさ。よく知ってるな。おっ、くじらだ」

イダテンくんが指さす方を見ると、水の上に大きなイチョウのような黒い尾
びれが見えます。尾びれが水面^{みなも}をたたいてしぶきを上げると、そのむこうに大
きな黒い体があらわれました。その背^せ中^{なか}からふん水のようにしおがふき上がる
のを見て、ななこちゃんは『はあ』とため息をつきました。

そのまま二人は、ずいぶん長いことだまって海を見ていました。

「ほかの海も見せてやろうか」

イダテンくんにそう言われた時、ななこちゃんはここをはなれるのがもった
いない気がしてためらったのですが、知りたがり屋のむしに背^せ中^{なか}を押されて立
ち上がりました。ほかの海ってどんなだろう？

ななこちゃんがイダテンくんの背^せ中^{なか}におぶさると、海のモザイクはその色
を溶^とかして、また真っ白な光に変わりました。

今度目を開くと、ななこちゃんはコンクリートの地面に立っていました。息を吸い込むと、今までにかいだことのない強いにおいがして、むせそうでした。海はすぐ目の前にあって、いくそうもの船がエンジンを響かせながら行き来していました。

「魚をとる船のみなとだ。ほら、とってきた魚を下ろしてるだろ」
イダテんくんの指さした方を見ると、コンクリートの地面に横づけされた船から、男の人たちがいくつもの大きなはこを下ろしているところでした。はこの中で大きな魚がはねて、銀色のうろこが光っています。

その次には、ななこちゃんは高い高い橋の上に行きました。海の上にかかっている大きな橋です。橋の上をたくさん自動車が走っていました。遠くに高いビルがかたまっている大きな街が見えました。橋のそばを大きな船が通っていました。

その次に白い光をぬけた時、急に冷たい風がふいてきて、ななこちゃんは思わず大きなくしゃみをしてしまいました。足元を見ると、白い氷の地面に立っています。

「ここらへんは、もうすぐ夜になる」

「冬になるんじゃないの」

「うん。冬の間じゅうここでは朝がこないんだ。一年の半分は夜のままだ」

イダテンくんの話はあまりにふしぎで、ななこちゃんはすぐには信じられませんでした。ほんとうに、何か月も朝が来ない場所なんてあるのでしょうか。向こうの氷の山にペンギンがならんでいるのが見えてうれしかったのですが、ただただ寒くて、足ぶみしながら、『別のところに行こうよ』とイダテンくんをせかしました。

気がつくともまっ白い砂すなの上にななこちゃんは立っていました。砂すなはどこまでも続いて、白い波が寄よせてきてはその端はしをぬらしていきます。ななこちゃんはくつをぬぐのわすれも忘れて、海の方に走っていきましました。まだ冷たい水がそれでも気持ちよくて、ななこちゃんは何度も波に手をかざして服をびしょびしょにしてしまいました。

「かせひいても知らないぞ」

もどって来たななこちゃんをイダテンくんはあきれたように見ながら言いました。それから二人は、砂で大きな山を作ったり、トンネルをほったり、きれいな貝がらをひろったりして遊びました。手も服も砂だらけになって、きこすったほつぺたにまで砂がくつつきました。二人は気にもかけませんでした。そして、お日さまが海に近づいて真っ赤になるころ、またあの黄色い菜の花の原っぱにもどって来たのです。

「ねえ、あしたもいつしよに遊ぼうよ。明日の朝、おべんとう作ってここに来るから。ゆびきりげんまん」

ななこちゃんは、そういうと小指を立てました。イダテンくんはその小さな指をじっと見ていましたが、あわてたように手を背中せなかにかくてしてしまいました。

「だめだ。指きりなんてできない」

「どうして？」

首をかしげるななこちゃんから目をそらせて、イダテンくんは横を向きました。

「人間は、ときどき約束やくそくをやぶることがあるけど、神様は約束やくそくを決してやぶらない。だから、できない約束やくそくはしちやいけないんだ」

「言ってることがわからないよ」

「ななことはここでお別れだ。元気でな」

そう言うとイダテンくんはくるりと後ろを向いてしまいました。ななこちゃんは小指を立てたまま動けなくなってしまうました。

「なんで？また遊ぼうよ。友だちでしょ」

日がかげって、冷たい風が菜の花の原っぱをゆすりました。イダテンくんの肩かたがいつしよにゆれたように見えませんでした。

「オレは、ななこと友だちになんかなれない」

イダテンくんは背中せなかを向けたまま、小さな声で言いました。
「えっ」

いきなりつきとばされたような顔になって、ななこちゃんは、イダテンくんの背中を見つめました。

「もしかして、楽しくなかった？」

おそろおそろ、ななこちゃんはたずねました。

「ななこは、今日すつごく楽しかったんだ。いろんな海を見せてもらって、どろんこになりながら遊んで。でも、イダテンくんはいそがしいから、めんどくさかったのかな」

すぐそばにイダテンくんの背中せなかが見えているのに、なんだか高いがけの上から話しかけているみたいで、ななこちゃんは話しながら顔をくしゃくしゃにしてうつつむいてしまいました。それでも、イダテンくんは何も言いません。

「ごめんなさい」

よくわからないけど、イダテンくんを困こまらせた気がして、あやまらないといけない気がして、ななこちゃんは小さな声で言いました。

「なんで、あやまるのさ」

イダテンくんは怒おこったように言いました。

「ななこはなんにも悪いことなんかしてないじゃないか。オレだって今日は楽しかった。人間と遊んだのは初めてだったけど、すっごく楽しかった。オレだって……、ぼくだってななこと友だちになりたいよ」

イダテンくんの声はしりつぼみに小さくなって、その細い肩をいっそうすばめました。

「でも、ななこことだって、だれとだって、ぼくは人間と友だちになっちゃいけないんだ」

「なんで？なんでいけないの」

聞いてはいけないことを聞いている気がして、ななこちゃんはおそろおそろたずねました。それでも、声はついつい大きく早口になってしまいます。

「ぼくは神様の子供だ。いつか父さんのあとをついで、本物の神様にならなくちゃいけない。神様は全部の人間に公平でいなくちゃいけないから、誰か一人を特別にしちゃいけないんだよ。誰か一人の人間とだけ仲良しになっちゃだめなんだ」

ごうつと、強い風が菜の花をゆらして冷たい空気を運んできました。お日さまの光もすっかり弱くなって、夜はすぐそこまでやってきています。

「今日ななこが、『ちよつと、遊んでいこう』って言っただろ。あの時、ぼくは父さんをお願いして今日一日だけ特別にゆるしてもらったんだ」

遠くの空に一番星がうつすらとまたたいて、背中を向けたままイダテンくんは顔を上げてじっと星の方を見ていました。ななこちゃんはイダテンくんの言っている意味が半分もわかりませんでした。その後ろすがたを見ていると、なんだか一番星をこわい目でにらんでいるような気がしてイダテンくんがとてもかわいそうになりました。イダテンくんはいつか神様になるので、人間の友だちを作ってはいけないということだけはよくわかったのです。

どうしたらいいんだろ——。ななこちゃんはいっしょけんめいに考えました。このまま、さよならを言うのはさびし過ぎます。なにより、ななこちゃんは今すぐ小学校に入学してたくさんの友だちができることでしょう。それなのに、イダテンくんはずっと一人ぼっちのままです。『全部の人間に公平でいるために』って言うけど、そのせいでななこちゃんたち人間に比べてイダテンくんがひどく不公平なことを押しつけられているように思えたのです。

お日さまの光はほとんど消えて、夜がやってこようとしています。

「ごめん。もう帰らなくちゃ。ななこも早く帰らないとお父さんたちが心配するよ」

あたりはうす暗くなって、すぐ目の前のイダテンくんの白い服もぼんやりとしか見えなくなりました。体をぶるつとふるわせて、ななこちゃんは空を見上げました。一番星が小さな小さな光をまたたかせています。ふいにななこちゃん

んはいいことを思いつきました。

「じゃあさ。約束なしの約束しようよ」

「えっ」

イダテンくんがふり返りました。

「指きりもしない。明日の朝にここで待つのもやめる。でも、ときどきここには来るから、いつか、たまたま会ったら遊ぼうよ。別に特別な友だちじゃなかったってさ。ひさしぶりの人に会ったら少しくらいおしゃべりしたり、遊んだりしてもいいんじゃないかなあ」

イダテンくんは、ななこちゃんが言ったことを何度もくり返して考えているようでしたが、やがてにっこり笑ってうなずきました。

「うん。それならいいと思う。いや、とてもいい考えだ」

イダテンくんは何度もうなずきました。

「だから、さよならを言うのはやめようよ」

ななこちゃんも、にっこり笑って、さよならのかわりのあいさつをしました。

「またね」

イダテンくんは思いもしなかった言葉にまごついたみたいでしたが、すぐに「うん。またな」

と言って笑いました。

明日かもしれない。あさってかもしれない。もっとずっと先かもしれない。いつだかわからないまた会う日を楽しみにしながら、指きりはせずに、ななこちゃんとイダテンくんは手をふりました。

「それまで元気だな」
そう言つて、イダテンくんは地面をけるとつむじ風を残して帰って行きました。

その夜。ななこちゃんはつかれて、ぐっすりとねむりました。そして、イダテンくんといっしょにくじらの背中に乗って泳ぐゆめを見ました。

小学校に入学して、少しづつななこちゃんにもお友だちができました。でも、あのアシぶえは大切にしまっていて、それをときどき首からかけて、あの菜の花の原っぱに一人で遊びに行きます。

今日ではないかもしれないけれど、いつかイダテンくんがつむじ風をまきおこしながらいきなり目の前に飛び出してこないかなあと、心待ちにしながら。

おしまい